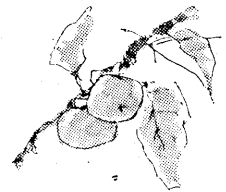


イギリス産業革命期の幼児教育 (一)

サミュエル・ウィルダースピン

——ウィルダースピン・システムの確立と普及——

久保いと



ブカナンとウィルダースピン

オーエンのニューラナークにおける幼児教育の実績は、人道主義的な政治家たちの注目をあつめました。ブルーム卿もその一人でした。彼はニューラナークの実践をみて、この混乱した社会から貧しい幼児をまもるには幼児学校がもっとも適切であると確信し、またふるい教育の方法をうちこわしあたらしい方法を摸索し確立した人として、現場教師であったブカナンの指導力をたかく評価していました。

彼はブカナンについて「ニューラナークの実践が成功したのは、しあわせにも偶然に忍耐がよく気転がきいて、またらしい地位に必要な発明の才のある一人の教師がみつかったためである」と考えていました。それで二年後の一八一八年に、ブルー

アムが協力者とともにロンドンのウエストミンスター地区に貧児を対象として『ウエストミンスター無償幼児保護所』を設立したとき、この教師としてブカナンをむかえたのです。

一八二〇年のある日、ある教師の家で、ブカナンはウィルダースピンに出会いました。この時ブカナンは三五歳、ロンドンにきてすでに二年間も貧児教育の経験をつんでいました。一方ウィルダースピンは三八歳、サウス・ロンドンのスウェーデンボルグ系教会の書記で、数年のあいだ教会の活動的なメンバーとして貧しい人たちの社会状態にたいして関心を刺激されていきました。二人の話はおのずから貧しい子どもたちのための幼児学校へと発展し、ウィルダースピンは熱心に自分の考えをブカナンに説明しました。

一八二〇年六月二四日、ジョセフ・ウィルソンという人が設

立費と維持費を負担して、紡績工場労働者であったスパイタルフィールド地区に幼児学校を開設しました。最初の日に二六人の子どもが入学し、二日めには二一人、八月七日には三八人、そしてこの日、ウィルダースピンとその妻がブカナンの紹介によって、この幼児学校のスクールマスターとして着任しました。この時から、ウィルダースピンの真摯でめざましい幼児学校へのとりくみが始まったのです。

ウィルダースピンの活躍

さきに彼の生涯から述べることにします。ウィルダースピン(Samuel Wilderspin, 1792~1866)は約四年間スパイタルフィールド幼児学校のスクールマスターとして留まり、その間全力をあげて幼児学校の教育組織の研究と運営にあたり、彼の仕事は成功し、社会の注目をあつめるにいたりました。貧児の教育機関として、幼児学校の効能が十分に証明されたわけです。しかもウィルダースピンの幼児学校はオーエンとは別の理論と方法によって運営され、彼の方法はウィルダースピン・システムとよばれていました。

ウィルダースピンの幼児学校は、いまやロンドンにおける有名な幼児学校になったのです。したがって、ロンドンやケントやサセックスなどの地方にも同じような幼児学校を設けようと

する運動がおこり、ウィルダースピンは招きに応じて積極的にその地へ出かけていって、幼児学校設立のための建物の設計や教育内容・方法などについてこまかい指導をする労を惜しみませんでした。

彼の留守のあいだは、彼の妻と娘が二〇〇人にもふえた幼児を教育し、おまけに朝から晩まで訪れる訪問客にウィルダースピン・システムを説明する役割もはたしました。このような不断的努力はやがて妻の生命をちぢめ、彼は妻を失うのです。これを機に彼はスパイタルフィールドを去って、一八二四年にあたらしく設けられた『幼児学校協会』の巡回教師になったのです。

幼児学校協会は、ランスドーン侯やブルーラムやオーエンらの多くの有名人の支持によって設けられたものです。協会の目的は、英王国を通じてあまねく幼児学校を普及すること、中央模範学校を設けること、寄附金をあつめることでした。ウィルダースピンは巡回教師としてめざましく活躍し、はじめの年には三四校の幼児学校を開設し、さらに一四校が開校をまつばかりに準備をととのえていました。なお、これらの幼児学校はすべて有志の寄附金によって慈善として建てられ運営されたものです。

こうして協会は数年のあいだ実績をあげていましたが、中央

模範学校をつくる計画だけはついに実現をみないで、のちだいに消滅してしまいました。そのあとウィルダースピンは独力で普及の努力をつづけていったのです。まだ鉄道がなかったころのことですから、馬車や船で信じられないくらいの困難な旅行をしながら、イギリスの各地をまわって幼児学校の普及につとめました。そしてそれは、ウィルダースピン・システムによる幼児学校の普及でした。この努力は大へんなものでした。

一八三五年に、チャンバーという人は、ウィルダースピンの努力をたかく評して次のようにいっています。すこし長くなりますが引用しましょう。

「こんなに早い時期にこの人のサービスを得たことは、幼児教育の振興にとつてしあわせなことだった。非凡な活動力と器用さと熱意と、どのような障碍をも無視してつきすすむ熱心さを仕事に注ぎこんで、彼は幼児教育を科学たらしめた。……彼はまた首都と地方において幼児学校を組織するためのサービスを求められた。この方面における彼の能力と熱意とは、教授のシステムづくりよりもっと顕著であった。もし、スコットランドの北の端や、アイルランドのどこかに一つの幼児学校が設けられることになったら、ウィルダースピン氏は彼の常住地から、いつでももっとも少ない旅費でそこへ旅立ち、子どもと教師のトレーニングのために六週間をすこす用意ができていた。

そして彼が訪問したところでは、講義や話や学校におけるウィルダースピン・システムの実演をとおして、その近隣にもっとセミナーをつくりたいと人びとに思わせることに成功した。この非凡な人を特徴づけるものは、完全な自己の放棄であり、このことは彼が生命の危険をおかしてまで西インドへいって、黒人のために幼児学校を組織したいと申し出たことによっても証明される。彼が王国にひらいた幼児学校は、今や（一八三五年）三〇〇校以上に及んでいるし、また彼自身二〇、〇〇〇人以上の子どもの直接の教師であった」と。

ウィルダースピンの貧児救済への情熱と幼児学校普及への献身は、たかく評価されなければならないと思います。このようにして、十数年にわたって独力で教育組織の確立と幼児学校の普及に努力したあと、一八三九年にアイルランドの教育委員会の招請をうけて、彼はダブリンにある中央模範学校のスクールマスターに任命され、ここで一八四一年まではたらきました。のちイングランドにかえり、終生市民年金をうけました。

ウィルダースピン・システム

ウィルダースピンは以上のように献身的に貧民のあいだに幼児学校を普及したのですが、そのさいひろめてまわったのは、彼の発案になる幼児学校の教育方法でした。このシステムは、

スパイタルフィールド時代の努力によってほぼできあがったもので、ウィルダースピン独自の幼児学校舎建築様式と、遊具・教具の設備備品、および、独自の教育内容と方法をそなえたものでした。いま、そのシステムについて紹介しておきましょう。

ウィルダースピンは、幼児学校は五〇人より少なくてもいけないし、二〇〇人より多くてもいけないと考えていました。職員構成は、これだけの幼児にたいし、男教師一人、女教師一人、夫婦である方が好ましいと考えられています。これは当時の幼児学校はすべて篤志家の慈善資金による無償学校であったために、できるだけ運営費をきりつめる必要があったからです。

彼のプランによると、幼児二〇〇人用の教室は、六〇フィートに二五ないし三〇フィートの大きさで、これに、六〇フィートと八〇フィートの広さの運動場がつきます。教室の一方のほしにギャラリー（階段教室）があつて、これは子どもたちみんなをすわらせて一斉教授をするときにつかいました。床には、レスンポストとよぶ可動式小掲示板が教室の長い壁に並行して五ないし六フィート間隔で立っていて、これらのポストにはレスンのさいにレスンボードがかけられ、レスンポストごとに六人の子どもと一人のモニター（助教、子どもたちのなかからす

ぐれた子をえらんで助教とし、グループの子もたちの指導にあたらせます。これはモントリアル・システムといって、そのころイギリスでは年長児の学校で安あがりな方法としてさかんにつかわれたものです）が立ち、グループの子に教授します。また教室の壁にそつてぐるりと椅子がおかれ、そこで子どもたちはレスンポストにたつ自分の順番がまわってくるまで静かに待っています。算術の授業には、アリスメティコンと名づけられたソロバンスタンドのような教具も使われました。

運動場には二つのロータリースウィング（回旋塔）——男児用と女児用——がそなえつけられ、木片の玩具がたくさん用意してあつて、それをつかつて子どもたちはいろいろな形や家などをくみたててあそびました。運動場には果樹や灌木が植えられ花でふちどりされていました。教師は運動場でも子どもたちといっしょに生活しました。これは事故防止のためばかりではなく、道徳的身体的訓練のためにも必要なことでした。子どもたちがあそびのなかで、たがいに正直と親切の習慣を身につけるようにみまもられるのです。

運動場でのあそびの選択は、子どもの自由にまかされています。ウィルダースピンは次のようにいっています。「子どもたちは気分がわるいかねむっているのだからすべて活動しているし、あるいは他の子が活動しているのをみつめているだ

ろう」。「もし子どもたちが自分でやらんだ活動であそんでいるなら、彼らは自由な存在であり、彼らの性格を表現している。もし彼らが欲しない活動であそぶよう強いられたとすれば、彼らは自らの性格を表現せず、束縛された奴隷である。したがって彼らの能力は発達しない」と。

彼は、子どもたちが戸外で太陽をうけて活動することにはまったく積極的でした。彼はあらゆる機会に、戸外の活動は子どもたちを教室の壁のなかに長時間つめこんでおくよりもはるかに好ましいことだ、この問題は民衆教育プランにおいて見失われるべきでない、とっています。自然条件においても陽光の少ないイギリスで、ましてスラム街の陰気で不潔な屋根裏べやなどを住み家としている貧民の子どもたちを対象とした幼児学校でしたから、花や緑や遊具のある運動場での自由なあそびは、子どもたちにとって福音であったにちがひありません。運動場のあそびについては、ウィルダースピンはまったく健全で改革的でしたし、オーエンの遺産をそのままうけついでいたといえましよう。

ギャラリーによる知育

ウィルダースピン・システムのもっとも核心的な特徴は、教室の一方のはしにしつらえられたギャラリーと、それを使って

の知育にありました。ギャラリーとは固定してつくられた幅ひろい階段状の座席です。階段教室ともいえましよう。彼は次のようにいっています。「私は座席についていくつかの実験をしたが成功しなかった。しかしついにギャラリーをつくること、つまり段階的な階段——最幼少児は一ばん下にすわり年長児は上にすわる——をつくるのが、望ましい目的にたいする答となった」と。

ギャラリーでは、どの子からも下方の教卓にたっている教師がよくみえるので、多人数の幼児を秩序整然と一斉教授するための設備として、ウィルダースピン・システムにとってなくてはならないものとなりました。事実、彼によってひろめられた何百という幼児学校には、必ずギャラリーが設備されていたのです。ギャラリー自体はめあたらしいものではなく、ふるくは教会堂の唱歌隊用の設営として使用されてきましたし、オーエンの性格形成学院の年長児用教室にもとりつけられていて、ここでは年長児がオーケストラの練習をするときに使われていました。

そのギャラリーを、ウィルダースピンは幼児学校の「知育のための一斉教授の設備」としてとりいれ、ギャラリーでの教授を組織化したわけです。そしてこれはその後十九世紀の末葉まで、ほとんど何の疑問ももたれないままに、教授能率をあげる

ための幼児学校の必須設備として公認されることになったのである。幼児学校からギャラリーをとり去るには、幼児学校教育自体のていつ的な改革をまたねばなりませんでした。

さて、それでは、このギャラリーとレスンポストやアリスメティコンなどによって、何がどのように教えられたでしょう。教科目は、よみ方・かき方・算術・幾何学・地理・博物・植物学・天文学・文法・会話・図画・音楽・宗教・体操・それに道徳的宗教的訓練が加わります。こんなに多くの教科目をこなすのですから、計画を必要としました。したがってウィルダースピン・システムの幼児学校では、オーエンのそれとは反対に、毎日の時間割がつくられていました。たとえば月曜日の日課は次のとおりです。

時間 朝九時——十二時（一度帰宅する）

午後二時——冬四時

夏五時

朝 一同があつまると祈禱、讚美歌。

次に皆に石板と鉛筆がくばられ、文字とスペルの練習がはじまる。

十時半——十一時まで遊戯。

十一時からギャラリーに着席し、教壇に助教がたち、博物の絵による授業がはじまり、反唱する。

午後 朝と同様、祈禱と讚美歌ではじまる。レスンポストによって聖書史を絵でまなび、反唱する。

そのあとギャラリーへゆき、そこで先の授業について質疑応答する。

幼児学校は通常二歳から七歳ぐらいの子どもが入っていて、一週のあいだほぼこれと同じような日課表にしたがって、二歳児も七歳児と同じに教えられました。ただ幼い子どもたちはむずかしい授業がはじまると前列におとなしくすわって、年長児が反復練習するのをきいて口まねしていたのです。ウィルダースピンは、あらゆる知識を教えることに熱心な百科全書主義者でした。二〇〇人の子どもたちを一つのひろい教室で男女二人の教師で教えるのですから、知識は教師がことばとしてあたえ、うけた子どもはそれを反復練習して暗記しました。子どもたちは実によくいろいろなことを暗記しました。そして知識教授はしだいに凝って、しまいには一般の人が知らないような専門用語まで教えるようになりました。こうして神童主義の教育とさえ評されるようになったのです。

小さい子どもに多くの知識を教えるために、ウィルダースピンはできるかぎり教授法をたのしくするようくふうしました。算術なども、おもしろい歌をうたいながらすすめたり、アリス

メティコンをつかったりします。小グループで助教が指導したりギャラリーにみんなをあつめて教師がおさらいをしたり、いろんな形態をとります。子どもたちが単調なレスンにあきあきたら、気分転換や注意集中のために、すわったままのあそびもくふうされてきました。「そよ風」とか「つよい風」とか「あらし」というあいずとともに、子どもたちはすわったままで手をこすったり、ヒューッという音を出したり、足をばたばたうごかしたりして、レクリエーションをしたのです。

ウィルダースピンは、学校とよぶからにはシステムがあるのが当然だと考えていました。そしてウィルダースピン・システムとは、すでにあげたような多くの教科目を、特殊の設備と教具と教材を用いて、特殊の技術によって教えることを意味していました。したがって、彼は、彼の幼児学校にはシステムがあつたから幼児学校とよぶにふさわしいが、オーエンのそれにはシステムがなかったから、あれは幼児学校ではなくて幼児弧児院にすぎない、と考えるのです。ここには、教育というものをどう考えるかについて、オーエンとウィルダースピンとのあいだに根本的な違いがあつたことに気づくでしょう。そして、これは単に、過去のある国のできごとではなくて、オーエン的教育観とウィルダースピンの教育観の対立は、今日の日本でもやはり生きつづけているといわなければなりません。

意義

ウィルダースピンの業績をどう評価するかはむずかしい問題です。彼の幼児学校理論は、あきらかに産業資本家の支配する国家権力に奉仕するものであつた、と評価する立場がありません。

たしかにそういう側面があつたことを否定することはできません。彼自身は小市民の出身ですが、保守的伝統的思想の持ち主であり、クリスチャンでもありました。したがって彼が組織した幼児学校もまた、キリスト教的人間観と保守的伝統的教育観に立脚したものでした。ウィルダースピンには、オーエンのような合理的な社会制度と性格形成についての洞察や展望が欠けていたことも事実です。彼の生涯にわたつた活動は、暴動をおこしがちな貧民労働者たちの救済と慰撫と治安に役だち、結果として保守階級と新興産業資本家の安泰のために奉仕したことになるでしょう。

しかし、ウィルダースピンの業績をそれだけで律し切ることには、ながい歴史の流れからみると、すべてを説明することにならないのではないのでしょうか。それまでまったくの無学文盲に放置されていた国民の大部分を占める貧民たちが、よみかき計算という知的武器やその他の多くの知識をうけたという事実は

それだけでほうむりさつていような単純な事柄ではありませんでした。民衆教育の伝播と蓄積そのものが、つきつぎとあたらしい民衆のエネルギを生みだす契機になったという事実を忘れてはなりません。

当時のイギリスの無産大衆の状況を考えると、もしウィルダースピンという人がいなくて貧民の子どもたちが惨状をきわめた動物的状態のままに放置されていたとしたら、オーエンの理想も、ラヴェットの労働者教育論も、おそらくははるかに実効のうすいものに終わり、イギリスの民衆教育の進展はもっとおくれたのではないでしょう。民衆が自分のおかれた立場と社会のしくみに矛盾を感じ、自らの権利の確立を求め、またそれを可能にする政治的経済的条件を追求しようとする過程において民衆自身の知的成長は必要不可欠なものと思えます。

ウィルダースピンの生涯をかけた活動は、一面において当時の支配階層に奉仕したけれども、他の一面においては、無産者階級に教育をあたえて、知的啓蒙を促進する結果をもたらしました。それはオーエンのニューラーク工場村のように意図的に改良された一つの小さな社会における人間形成の実験ではなくふつうの条件下での貧民の人間形成の実験を数百にのぼる幼児学校で大々的に展開した意味は大きいといわねばなりません。

その人間形成の原理はオーエンとは異っていたけれども、貧民

もまた教育しだいで知的道徳的に成長しうる人間なのだということを実例によって世間に示し、また貧民自身にも自信をあたえた点では、オーエンに劣らぬ影響力をもっていたと考えられます。また、現実には、貧民たちを幼児学校に入れることによって彼らを苛酷な工場労働にかりたてることから守り、こうした既成事実のつみあげが、イギリスの初等教育の成立へと導いてゆくのです。以上のような点において、ウィルダースピンが民衆教育の促進のためにのこした足跡を評価したいと思えます。

しかしながら、権利思想という現代的視点から考えるならば彼の行為が上から下にたいする慈善であったという事実を見逃すことはできません。現代の歴史研究は、貧民への教育があるときには支配階級のつごうによって意図的にあたえられ、あるときにはあたえられなかったことを明らかにしています。世界にきぎがけて産業革命をなしたイギリスでも、さまざまな貧民教育思想がそのときどきの経済条件に応じてイデオログたちによって開陳され、支配者をうごかしてきました。そのような流れのなかでこそ、オーエンの活動は積極的な歴史的意味をもっていたわけです。わたくしたちは、教育というものは貧民にたいする慈善としたあたえられるべきものでなく、人間の権利として要求されるべきものであることを、ウィルダース

ピンをとおして逆に学びとるべきだと思います。つまり、ウィルダースピンのをのりこえなければならぬのです。

彼の百科全書的知的注入主義の早期教育については、これもまた現代人に示唆のないみをもっています。ウィルダースピンは貧兒たちに教育をあたえることによって、彼らを道徳的にすぐれた労働者として一日も早く独立させなければなりません。子どもたちは幼児学校を終えるやいなや、八歳ごろからもう一人前の労働者として働らき、社会に出てからはもはや教育をうける機会がなかったからです。彼がゆきすぎた暗記教育をすすめた背景には、下層階級の貧困がもたらした現実の要請があったものと解せられます。

わたくしたちが生きている現代もまた科学技術革新が急テンポですすむめまぐるしい時代です。国家の立場からは、国力のきそとしての経済力の発展のために、企業と、企業を基盤とした国家権力によって、ひととき人材の開発が要請され、優秀な技術者労働者であってしかも体制に順応してはたらくような人づくりをめざして、意図的開発が早期から行なわれようとしています。さらに現代の日本では、商業主義という伏兵がひそんでいます。また親自身が子どもへの夢にかられて、開発をいそぎすぎる一般傾向もあります。質はちがうにしても、現代もま

たウィルダースピンの生きた時代と同じように、変化への過渡期にあるようです。

しかし、教育とは本来人間自身のためのもの、民衆自身のためのものであるべきはずです。このねらいをはっきりさせておかなければ、方向をまちがうことになります。人間性を見失う教育であってはなりません。ウィルダースピンをふりかえりながら、わたくしたちは、わたくしたち自身のなかにあるいはまわりに、同じような傾向がないかどうかを考えてみたいものと思います。

参考文献

- S. Wilderspin; *The Infant System*. 1852
D. Salmon & W. Hindshaw; *Infant Schools, their History and Theory*. 1904
T. Raymont; *A History of the Education of Young Children*. 1937

津守真・久保いと・本田和子、「幼稚園の歴史」昭三四
日本教育学会、「教育学研究」第三五卷三号

就学前教育特集号 昭四三

(和光大学)